

合同演習にかかる力ネは無駄だ、など言っています。

大米帝国、パクス・アメリカーナの世紀は確実に終わった。そうした中で朝鮮半島の自立化の動きが出てきているのです。しかも、それと照応するかのようには、中国の台頭があるわけです。

PPP（購買力平価）で見ると中国は14年に米国を抜いて世界最大の経済大国になったというIMF（国際通貨基金）の報告は世界に衝撃を与えましたが、早ければ2020年代初めにも名目GDPでも米中が逆転するという時代になっている。つまり、中国の巨大な経済力が、社会的な発展を伴いながら、世界市場に登場してきたという状況。習近平主席は17年のダボス会議（世界経済フォーラム）で、われわれは世界に国際公共財を提供する固い意思を持っている、自由貿易の旗手になると語った。かつてなら米国が言うはずの言葉を、社会主義中国のトップが言うという時代へ変わってきました。

そして、米国の衰退と裏腹の関係にあるかのように、英国とEU（欧州連合）が分裂し、EUの中でポピュリズムが台頭し、EU自体の経済的役割が衰退し始めています。まさに21世紀パクス・アジアーナ、私の言う「アジア力の世紀」が登場し始めているのです。2017年に出した本、『アメリカ帝国の終焉』

の冒頭で、米国の政治学者イアン・ブレマーがトランプ当選のその日に語った「トランプの登場はパクス・アメリカーナの終えんを象徴している」という言葉を引用し、これが21世紀の幕開けの意味だと言いました。

繰り返し強調したいことは、情報革命の進展がパクス・アメリカーナを終わらせ、パクス・アジアーナを登場させていること、そしてそれが「多極化世界」を生み出しつつあるということ。この多極化世界の構造が朝鮮半島にも及び始めているのです。多極化という新常态であることに注意してほしい。かつての米ソ二極化のような世界でも、米単極世界でもなく、いくつもの国がそれぞれ連携しながら秩序をつくり上げていく多極化世界なのです。

しかし、その多極化世界の中心はあくまで中国を中軸とするパクス・アジアーナということになるでしょう。

## 米中双方の動きと「一帯一路」

次に、こうした中で、米国も中国も自らの役割を模索し続けている、ということに若干触れたいと思います。

はつきり言えることは、米国がなぜ衰退したかという点、原因は中東戦争です。私はよ

く「中東30年戦争」と言います。かつて17世紀前半、ヨーロッパの30年戦争の結果、1648年にウエストファリア体制がつけられ、王権の時代が終わって主権国家の時代が始まり、いわゆる「近代」が始まった。それと同じように、いま戦争で国力を使い果たし、情報革命の中で貧富の差を拡大させ、アメリカン・デモクラシーがアメリカン・ブルトクラシー（金融寡頭政治）、金権政治へ変質し、アメリカン・デモクラシー自体がソフトパワーとしての魅力を失った現在の米国。この状況を生み出したのは、いま言った中東30年戦争にほかならないのです。

中東をめぐるこの30年間、1991年の湾岸戦争に始まり、9・11テロがあり、アフガニスタン、イラク、リビア、シリアの解体があった。戦争と内戦、そして民衆の反逆としてのテロの噴出。これがヨーロッパにまで広がった。難民・移民の流れが地中海を渡り、そして陸伝いに、北欧州にまで及んでいく。それがクルドの反乱と連動し、トルコの政治体制を揺るがしている。

この状況に、中国は何を学んでいるのかというと、こうした米国流の外交のあり方をアジアに波及させてはいけない、ということ。米国が従来一貫してとり続けた対朝鮮政策の根幹は、はつきり言えば北朝鮮に鉄ついを加えつづし、「民主主義国家」に変えるこ